

## 式辞

春の日差しにあたたかさを感じる今日の良き日に、晴れの卒業証書授与式を迎えられた第七十三期生の皆さん、卒業おめでとうございます。

そして、ご参列をいただきました保護者の皆さま、卒業証書を受け取るお子さまの立派に成長された姿を見られ、さぞ嬉しく思われていることと思います。子どもたちへの十五年間の精一杯の愛情が、ここに身を結び、義務教育を修了されたこと、心よりお祝いを申しあげます。

さて、今回の卒業式も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、参列者や式典の内容にも残念ながら制限がかかることとなりました。思い起こせば、卒業生の皆さんが一年生の二月二十七日に大阪市の方針が示され、二日後の二月二十九日から約三か月間の学校休業となり、当時の三年生の卒業式は臨時休業の中、行われました。学校が臨時休業になる前日に、急遽『卒業生を送る会』を運動場で行うこととなり、みんなで歌を歌い、お別れの会を開催しました。卒業生の皆さんは、覚えているでしょうか。突然の『卒業生を送る会』の実施にも関わらず、立派に行えたことに、日頃から何事にも真面目に一生懸命に取り組んできた北稜生の底力と、人を想う優しさを感じられた送る会でありました。あれから約二年が経過しましたが、未だに新型コロナウイルス感染症は収束せず、皆さんはコロナと戦い・コロナと共に歩んできた中学校生活であったように思います。

このような状況にありながらも、皆さんの中には、真冬にも関わらず半そで姿で元気に登校する数名の男子生徒があり、真夏の暑い日にも関わらず、昼休み思いっきりボール遊びをしている多くの生徒の姿を日々見ていると、コロナに負けないパワーと生命力を感じました。

コロナの影響を受けて、五月に予定していた修学旅行は十月に延期となりましたが、当初予定の五月は、結果的に三日続きの大雨で、延期された十月は三日間とも天候に恵まれました。以前、一度お話をしましたが『人間万事塞翁が馬』という故事があるように、皆さんの長い人生で、何が幸せで、何が不幸であるのかは予測しがたい、というくらいの気持ちに余裕を持って、今後も歩んでほしいと思っています。

今日、三月十一日は、十一年前に一万八千人を超える犠牲者が出た『東日本大震災』が発生した日です。先日、『防災教室』を開催し、皆さんは『東日本大震災』の衝撃的な映像を見て防災の大切さを再確認したことと思います。現在は、このような自然災害のみならず、新型コロナウイルス感染症などの様々な危機から、自分自身の命を守ること、家族・友だち・地域の方々と助け合って、お互いの命を守っていくことが、生きていくうえで本当に大切なことであると考えます。卒業の祝辞に先立って、自然災害・感染症で犠牲となられた方々へ「哀悼の意」を表します。

この三年間、皆さんは、いのちの大切さについても色々と学ぶことができました。二月末頃か

らは、連日ニュースで信じられない光景を目にし、多くの人が傷つき、いのちを脅かされているという報道が続いています。戦争は、人間の生存する権利さえも奪うことから「最大の人権侵害である」と言われています。皆さんは、今まで中学校という社会の中で主に生活をしてきましたが、義務教育を終えれば、さらに大きな社会で生きていくことになります。これからは、一般社会の一員として、皆さんのような優しい心を持った人が、それぞれの国籍や年齢・性別、文化や言語、障がいの有る無しなど、互いの違いを認め合い、人の持つ良さや能力が十分に発揮できる社会を創ってほしいと切に願っています。

また、現在、北京ではパラリンピックが開催されています。皆さんが中学三年生の令和三年度に東京で夏のオリンピック・パラリンピックが開催され、北京では冬のオリンピック・パラリンピックが行われるという、おそらく今後はないであろうという珍しい年度の卒業生となりました。東京パラリンピックでは、走り幅跳びで金メダルを獲得したドイツの男子選手が、「東京オリンピックの金メダルの記録を超えられなかった」と悔しがり、また、卓球ではオリンピックに出場したポーランドの女子選手が、パラリンピックにも出場しましたが、個人戦では二回戦で敗退するというパラスポーツのレベルの高さもニュースとなりました。「自分自身に残された部分を最大限に生かす」という言葉をよく聞きますが、何か一つ補助となる器具をつけたり、ルールを少し変更したりすることで可能性を最大限にのばせることを実感した大会でありました。このことは、スポーツの分野だけではなく、あらゆる分野でも同じことが言えると思います。障がいの壁と言われるものなどは、人間の知恵と工夫、そしてあたたかい心で取り除くことができると信じています。

昨日、できあがったばかりの『卒業文集』を読ませてもらうと、その中に、素敵な一文がありましたので最後に紹介をしておきます。「コロナウイルス感染症の影響で、全国一斉に学校が休校となり一ヶ月が過ぎた頃、勉強が嫌いでいつも学校のことを否定的に考えていた自分が『学校に行きたい』と真逆のことを考えていることにひどく驚いた。当たり前の日常に自分がどれだけ支えられてきたか『日常のありがたみ』を、休校期間を通して気付くことことができた。」という内容でありました。この一文にあるように多くの卒業生の皆さんが、友だちとくだらない話をしていて、その瞬間がとても大切であったと感じたのではないのでしょうか。

結びに、今日の日を迎えるまで、様々な心配をかけながらも、立派に育ててくれた家族の方々への感謝の気持ちを忘れず、また、たくさんの笑顔や思い出をくれた友だちや母校に思いを馳せながら、四月から始まる新しい未来に向かって歩んでくれることを教職員一同、心より願っています。

令和四年三月十一日

大阪市立北稜中学校 校長 山咲進一